

第二ヴァチカン公会議開催より 50 年

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

1962年10月11日、法王ヨハネス23世は枢機卿、司教等のカソリック関係者総計2,450人を招集し、第二ヴァチカン公会議を開催した。さらにカソリック以外の宗派からも公式オブザーバーが集った。その教会代表者たちは、ロシア正教会、コプト（エジプト、エチオピア）教会、シリア、アルメニアの正教会、東欧ではロシア以外の正教会、古カソリック教会、プロテスタント側からは、聖公会、世界ルター教会、長老教会、改革派教会、ドイツ福音教会、クエーカー、組合教会、メソジスト教会、自由キリスト者、信仰と職制等から参集した。年1回のセッションが開かれ、1962年より1965年12月7日に閉会するまで、計4回開かれた。4回目のセッション（1965年）には、世界宗教者平和会議（WCRP）の開催準備を進めていた当時の立正佼成会の庭野日敬会長がゲストとして正式に招待を受けた。これはキリスト教以外の宗教、特に仏教徒が公会議に招待されるのは初めてで「異例中の異例」だった。

キリスト教の公会議は今までに21回開催されている。第1回目は325年のニカイア公会議で、第21回が1962年から1965年に開かれた第二ヴァチカン公会議である。平均すると80年に1回の割合で開かれているが、公会議のなかった一番長い時は、トレント公会議（1545～1562）より第一ヴァチカン公会議（1869～1870）までの306年間だ。逆に一番短い時は第16回コスタツツ公会議（1414～1418）から第17回パーゼル・フェラーラ・フィレンツェ公会議（1431～1447）であって、その間わずか13年だけだった。

第20回目までの公会議はその時その時起きた異端審議で、異端者の追放であった。さらに、会議における重大決定は、2回目の第一コンスタンティノポリス公会議（381年）で、聖霊も父と子と同列で三位一体説が確立。3回目のエフェソス公会議（431年）で、マリアが神の母として認定され、9回目の第一ラテラーノ公会議（1123年）で司教叙任権を法王側が掌中にしたこと、20回目の第一ヴァチカン公会議（1869～1870年）では法王の不可謬性をそれぞれ確認した。

しかし21回目、第二ヴァチカン公会議はそれまでの公会議と異なり、異端の断罪ではなく、自分たちの過去の過ちを認め、別れて行った兄弟たちとの一致を図るための公会議であった。

第二ヴァチカン公会議の要旨は次の通りだ。

◎典礼の改革

ミサは話し言葉で行う。それまでのラテン語ではなく、その地の言葉を使用すること。それまでミサに出席する信者に背を向けていた神父は、ミサ出席者と対面してミサを行うこと。典礼の改革に抗議したレフェブリアーニ派は異端とされ、カソリックから追放された。

◎聖書の使用

ラテン語よりの切り替え。各国語への翻訳が加速。教会において、個人およびグループの聖書の読本が可能となる。

◎キリスト教の統合

カソリック教会の歩みは、キリスト教から生まれた宗派との統合の歩みであること。第二ヴァチカン公会議以前には、カソリック以外のキリスト教との会合、対話の参加には特

別許可が必要だったが、今は無許可で参加でき、むしろ出席することを積極的に容認している。

◎エキュメニズム運動

反イスラエル宗教の糾弾。キリスト教徒はヘブライの友であることを宣言。ヨハネ・パオロ二世はイスラエル人を「兄たちよ」と呼んだ。彼と彼の後継者（ベネディクト16世）はユダヤ人会堂（シナゴグ）を訪れ、さらに前者は2000年に、後者は2009年に「なげきの壁」で祈りを捧げている。また、第二ヴァチカン公会議がなければ、1986年ヨハネ・パオロ2世による、また、2011年のベネディクト16世によるアッシジでの「平和の集い」を開催することはできなかっただろう。さらに、第二ヴァチカン公会議は、平和と正義を希求する人たちの協力を要請し、宗教の自由を容認する。現法王は、中東の教会で、「個々の正しいと思う宗教選択の自由」という個人の権利を説教した。

第二ヴァチカン公会議より、ローマ法王はじめ教会の中の人間のイメージは根本的に変わった。衣装、言葉、日常生活でのジェスチャーなどが普通の人間のものに近づいた。

1958年に法王ピオ12世が亡くなり、葬儀が行われた後、コンクラベ（法王選出選挙）が行われた。初めの頃はロンカッリ（Roncalli）、（ヨハネス23世の苗字）の票はなかった。それが選挙の回数を重ねるに従ってロンカッリの票が増えて行き、1958年11月4日に、票の多数を得て、271代法王として選出されたのだ。法王名をヨハネス23世と決定した。

過渡期におけるカソリックにとって、誰を法王に選出するかは大きな問題だった。コンクラベの投票は最初の頃、予想されたように混戦状態だった。規定された以上の、つまり出席者の3分の2+1票以上の投票数を得る枢機卿が現れなかった。そのうちに、是でもない非でもないロンカッリに票が集まり始めた。つまり、コンクラベの態勢としては、法王にロンカッリを選んでおけば、彼の在任中は可もなく不可もなく安泰に過ごせるだろうと考えられたのだ。それゆえに、法王になるような野望も希望も一切持っていなかったロンカッリは法王に選ばれ困惑したようだ。困惑した彼は神と直談判をしたようだ。つまり、「私のようになんらの野心もなく、改革の心を持っていないものが、なぜ法王に選ばれたのですか？」と神に聞いた。神は「あるがままでよろしい。ただ儀式の改革と教会の現代化（AGGIORNAMENTO）をすればよろしい」と言ったようだ。

ロンカッリは「良き法王」（PAPA BUONO）と呼ばれた。これは初期の頃は「無臭、無色、無害の法王」という意味で使われていたようだ。それが、後には「心ある素晴らしい法王」という意味に変わったのだ。

ヨハネス23世が世界の司教たちを2,450名も招集し、会議を開いたことは皆にとって全くの驚きであった。

ヨハネス23世の秘書を務めたローリス・カーポヴィツァ氏は97歳で健在。今でも50年前の出来事を克明に記憶しているという。そのいくつかを記すと、「ヨハネス23世は、公会議が

(11頁へ続く)

第 253 回研究報告会 (10 月 18 日)

「識字神話をよみとく」をよみとく 角 知行 (人間学部)

筆者は本年 9 月に『識字神話をよみとく—識字率 99%の国・日本というイデオロギー』という本を明石書店より刊行した。本研究報告会では、その概要の紹介をおこなった。

日本は教育水準がたかく、近世・近代をとおして識字率もたかかったとされる。しかし、近年の研究によれば、江戸時代に全国規模の識字率を推計することは無理がある。地域差や階層差がおおきいからだ。ましてや、それを世界と比較することも困難である。

本書第 I 部では、近代における「識字率 99%=世界一」という説もまた根拠がないことを解明しようとした。それは就学率と識字率の混同から生じた俗説であり、戦時下にプロパガンダとして流布され、戦後もいきながらえたとすぎないのである。

日本人や日本語がとくに優秀であったり、特異であったりするわけではない。第 II 部では、漢字の音訓二面性を評価する漢字擁護論の言説の分析をおこなった。

日本も諸外国とおなじく非識字者や限界的識字者をかかえた社会である。識字学習という教育的営為だけに還元されない、識字社会のありようを変革していくところみかもとめられる。第 III 部では、識字作文を素材にして、識字のエスノグラフィーによって、識字社会の支配構造の一端をえがいた。

(8 頁からの続き)

順調に進展するようにロレーの聖母マリア教会、アッシジの聖フランチェスコ教会に巡礼に出かけた。また、「過ちを犯したのは教会ではない。過ちを犯したのは教会の人間である」と述べたという。さらに「近代化のためのグローバリゼーションの足がかりを作った」とも語っている。

現ローマ法王ベネディクト 16 世は、第二ヴァチカン公会議に出席していたうちの数少ない生存者の一人である。公会議の開催時は 35 歳であって、その当時すでに若き神学者として知られていた。そして当時の枢機卿ヨゼフ・フリングスの相談役でもあった。現法王は、1962 年 10 月 11 日ヨハネス 23 世が、夜に自分の書斎の窓から「月夜の話」をしたことを鑑みて、2012 年 10 月 11 日、やはり、同じ書斎の窓から、サンピエトロ広場に集る人々に「信仰の年」の開催を宣言した。

現法王は、第二ヴァチカン公会議の内容は、その後の教会にとって、「羅針盤」であると規定している。さらにキリスト教は将来の型を与えるために現在をしっかりと生きなければならないという。「私も 50 年前には、この広場から書斎の窓の所にいるヨハネス 23 世を見上げ、希望と喜びに満ちていた。新しい春、新しい五旬節が来たようだった。今日もまさしく、我々は幸福であり、冷静さの中の喜びでもある。聖ピエトロの漁の網の中にも良き魚も悪い魚もある。船が進行すれば、逆風の場合もある。私たちは、ここ数年の精神的砂漠化を克服するために、公会議録を読み、福音を告げよう。主はいるのだ。私たちが忘れてはいない。キリストは常にわれわれと共にいるし、今日も幸せでいられるだろう」と結論づけている。

第 9 回奈良県宗教者フォーラムに出席

堀内みどり

9 月 29 日、標記フォーラムが東大寺金鐘ホールを会場にして開催された。「神と仏と日本のこころ—修験の歴史的展開—」をテーマとした今回の講演会では、一昨年から続く「修験道入門」の 3 回目として、二つの講演があり、約 330 名が参加した。

講演 1 では、久保田展弘アジア宗教・文化研究所所長が「平城京奈良—天皇と神と仏の出会い」として講演。平城京では、その背景となっている自然環境や世界から伝えられた知恵が宗教的営みの中で積極的に展開されていた。無縁社会と言われる現状では、少しでも宗教に触れることで心の落ち着きが得られる。奈良時代に実践されていた宗教的な営みが、現代につながるとし、真似事でもいいからお経などを唱えるという宗教的アプローチが救いへとつながるのではないかと呼びかけた。

講演 2 では、宮家準慶応大学名誉教授が、豊富な資料をもとに「奈良を中心とした修験の歴史と活動」について講演。修験道のイメージから話を進め、奈良を中心とした修験の分布や数々の遺跡や現在にいたるまでの修験の活動に触れた。また、天理教の教祖が神懸かりになったときに加持台になったことにも触れ、儀礼、思想、組織における天理教と修験とのかかわりに言及した。

講演会に先立ち、東大寺大仏殿で行われた「日本復興祈願祭」では、東日本大震災や紀伊半島豪雨の被災地復興祈願が行われ、宗派の異なる宗教関係者が一堂に会し、各宗派のお経を読み上げ、祝詞を奏上し、天理教の代表は、「よろづよ八首」を奉唱した。

なお、奈良県宗教者フォーラムは、日本のこころと宗教の役割を考える宗教者のフォーラムとして、平成 16 年に第 1 回「宗教者のめざすもの」を開催し、第 7 回 (平成 22 年) からは一般にも公開する形での講演会となった。「混迷する地球現代のなかで、日本宗教のあけぼのの地でもある奈良から宗教が果せる役割を探ります。日本文化の基層をなす『共生』や『和』の精神が育まれた奈良の地。対立ではなく、多様性を尊重する『信仰聖地』として、アジア、そして世界へ平和の光を発信することを願います。」という願いのもとに設立された。

平成 24 年度特別講座「教学と現代 9」ご案内

おやさと研究所では、今後 3 年間のシリーズで「海外伝道の現状と課題」を特別講座「教学と現代」として開催することになりました。シリーズ第 1 回にあたる「教学と現代 9」では、アメリカ、ハワイ、ブラジルの各伝道庁長をお招きして講演いただく予定です。

これらの国や地域に共通するのは、天理教の教えが初期には主として日系移民を対象に広まり、世代を重ねるにしたがって現地の人々にも布教伝道が行われるようになってきたということです。

幾多の時代を経て、今日、これらの国や地域における宗教状況、布教伝道の現況、世代を重ねての信仰、さらなる現地化を目指しての課題などについて、伝道庁長のお話を聴き、海外伝道における本教の課題について共に考えて参りたいと思います。

・日程：平成 25 年 1 月 29 日 (火曜) 午後 1 時～5 時

・場所：天理大学研究棟第 2 会議室

ご関心のある方は担当の者までご連絡ください。

「教学と現代 9」担当 金子 昭 akira-k@sta.tenri-u.ac.jp